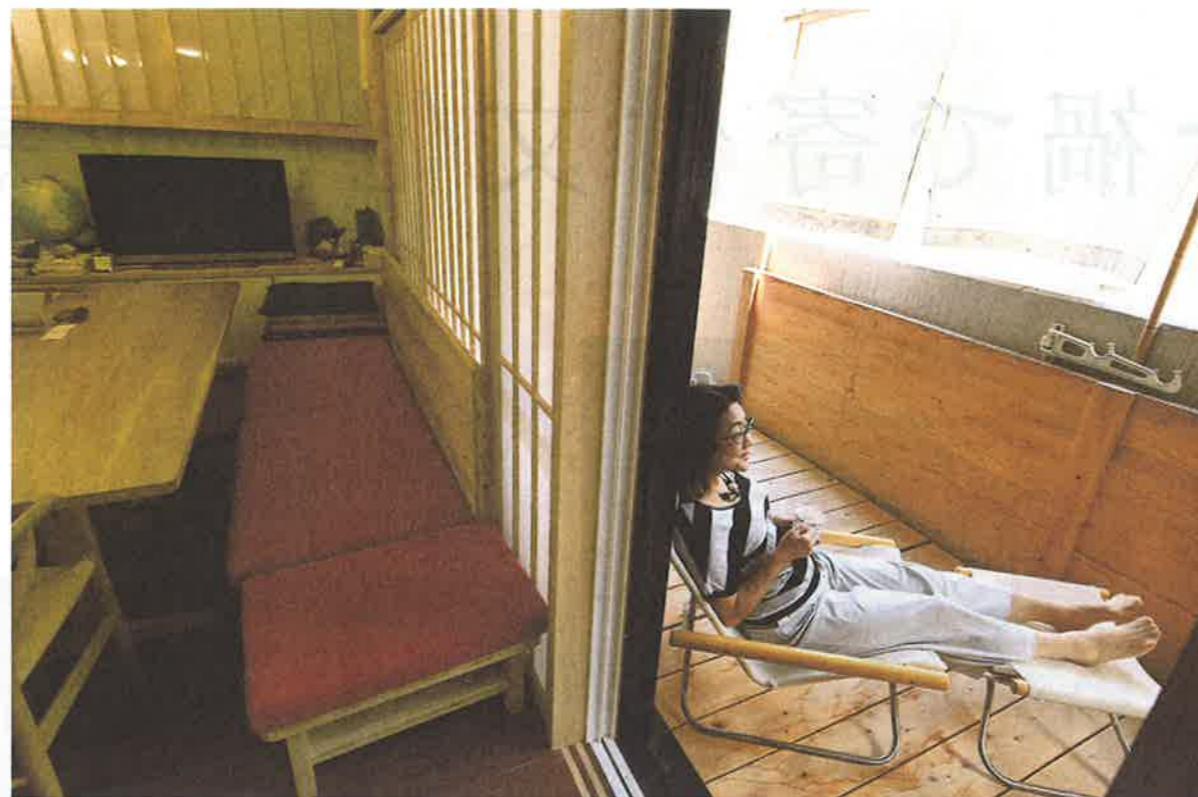
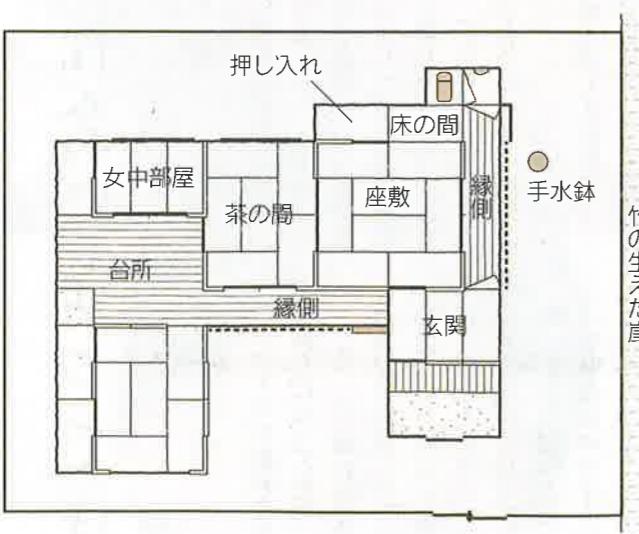


成瀬夏実さんの自宅。広がりが感じられるよう縁側に面した窓を大きくするなど、縁側を生かす工夫を随所に盛り込んだ。



京都市に暮らす加茂みどりさんはベランダに板を敷き縁側として使っている
集合住宅でも縁側を介して外と内がつながる町家の暮らしが再現できた



主人公夫婦の家の予想平面図



縁をつなぐ 心の居場所

現代的な洋風建築の住まいに縁側を取り入れる人も出てきた。人々にどうして縁側は、どんな役割を果たしているのだろうか。

瀬夏実さんは念願の縁側付きの自宅を新築した。庭に面したL字型の縁側は友人が来てもみんなでゆったり座って会話できる広さだ。子どもたちは毎朝縁側に出て遊ぶ。その姿を通りから目

かけた「近所さんが早速」「おはよう」と
あいさつしてくれるようになった。
成瀬さんは古いものへの憧れから、
カフェなどに再利用されている古民家
や、知人から紹介された個人宅など縁
側のある家170軒をこれまでに回っ
てきた。訪れた家に暮らす人が縁側で
ご近所さんとおしゃべりするのを目撃す
て、ずっとうらやましく感じていたと
いう。「自分が求めていた交流の形がや
つと実現できました」

はここで一休みします」。ラウンジチェアに寝そべり、そうほほえんだ。

縁側での過ごし方に小説の主人公の心理が表れている——。そんなユニーグな観点から夏目漱石の小説を研究したのは京都産業大学の准教授（日本庭園史）、エマ・ニュエル・マレスさんだ。フランス出身のマレスさんは日本語の勉強中に縁側と出会った。「縁」という独特の概念の理解に苦労していたとき、授業で「縁側が家の内と外をつなぐように、縁は人と人、物事と物事をつなぐ」と聞き、興味を持ったという。

「縁側のあるマンション」だ。大阪ガスのエネルギー・文化研究所の主席研究員で1級建築士の資格も持ち、集合住宅のあり方を研究してきた。3年前に自宅をリノベーションした際、長年の研究結果を踏まえて「自分が育った京都の町家のような風通しの良さを持たせたい」と考えた。

そこでベランダに板を敷いて、縁側に変身させたのだ。シェードで日差しと外の視線を遮り、居間から靴を履かずにそのまま出られるようにした。穏やかな外気が楽しめる一方で、ガラス戸を隔てた室内とも一体感がある。

加茂さんは町家の縁側や土間は「家の外でも内でもある中間領域」だとう。室温の調整をはじめ様々な機能を担っていた。「縁側を通じて四季の変化を感じ、訪問者を迎える。様々な作業の場でもありました」。加茂さんにとっては在宅勤務の合間に疲れや心を癒やす場所となっている。「仕事に疲れたときは

ぐ」と聞き、興味を持ったという。漱石の小説には縁側がしばしば登場する。なかでも「門」は縁側のシーンが多い。主人公夫婦の住まいは都内の縁側付きの小さな家だ。夫の友人を裏切って結婚に至った罪の意識から夫婦は外部との交流を避けている。妻は日が落ちてからのみ、2つある縁側のうち人目に付かない崖に面した方にしか出ない。マレスさんは妻にとつて明るい縁側は「自分の罪を白日の下にさらすことであり、耐えられない」のだと指摘する。小説の夫婦が縁側で客を迎えることはない。「主人公の家の縁側は家族だけで楽しむ『内の空間』だったんですね」(マレスさん)

漱石自身にとっては、縁側とはロン・ドン留学中、懐かしい日本の暮らしの象徴として常に思い出す存在だった。妻には「日の当たる縁側に寝転んで庭でも見ること」が帰国時の楽しみだと書き送っている。今の時代も縁側と聞

はここで一休みします」。ラウンジチェアに寝そべり、そうほほえんだ。